

日本気象学会 2007年度秋季大会

会期：2007年10月14日（日）～16日（火）

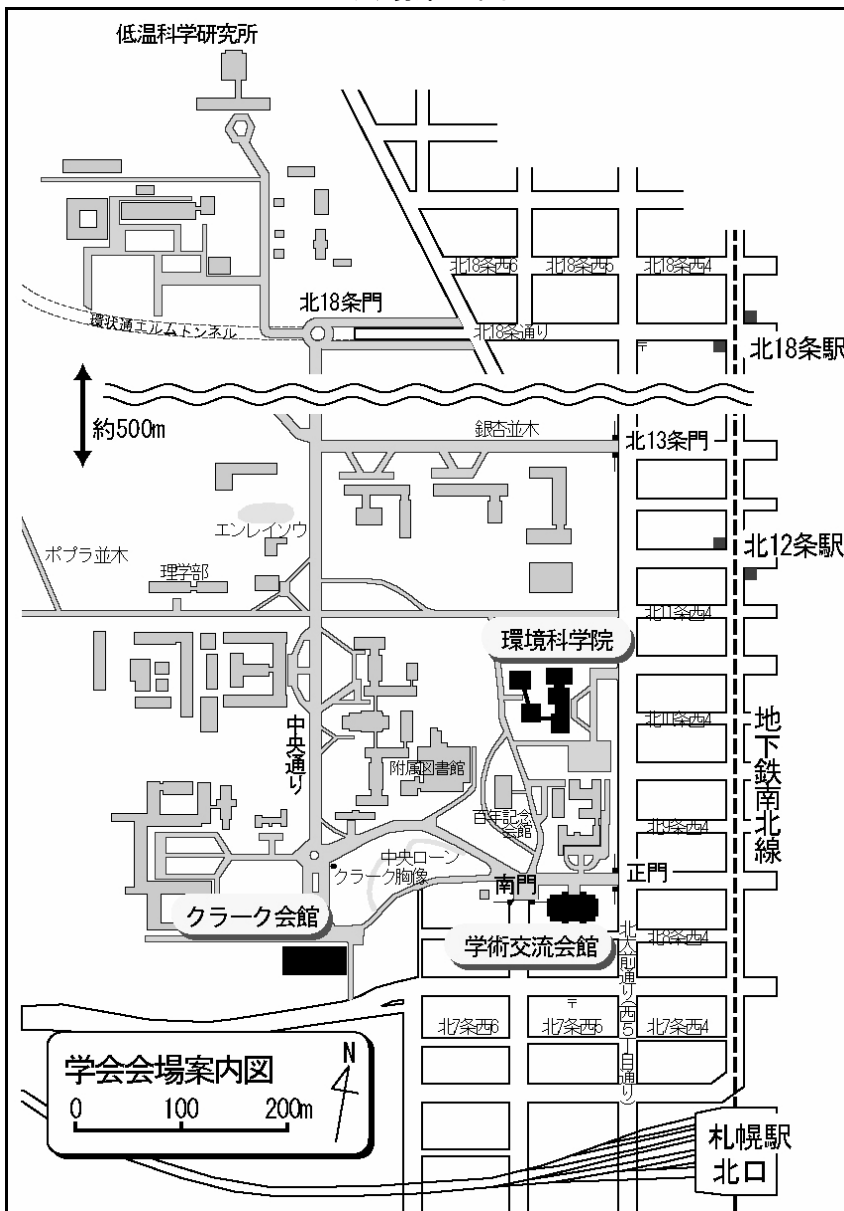
会場：北海道大学 学術交流会館・環境科学院・クラーク会館（札幌市北区北8条西5丁目）

大会実行委員会担当機関：札幌管区気象台，北海道大学低温科学研究所，
北海道大学大学院地球環境科学研究院，北海道大学大学院理学研究院，
北海道大学大学院工学研究科，（財）日本気象協会北海道支社，
札幌総合情報センター株式会社

大会委員長：岡野 誠（札幌管区気象台）

当日の会場への連絡先：北海道大学 学術交流会館 会館事務所（電話：011-706-2141）

会場案内図



交通の案内

- (1) 新千歳空港からJR札幌駅まで
JR：快速エアポートが15分間隔
（所要時間36分間）
料金1,040円
バス：新千歳空港ターミナルから
JR札幌駅まで（高速道路
経由）中央バス・北都交通
バスが航空機到着の都度
（所要時間約75分）
料金1,000円
- (2) JR札幌駅から会場（北海道大学学
術交流会館）まで
徒歩5分（JR札幌駅西改札口を出
て右側の駅北口から）

大会行事予定

A会場 : 学術交流会館 講堂
 B会場 : 学術交流会館 小講堂
 C会場 : 学術交流会館 第一会議室
 D会場 : (14日) 環境科学院 C104講義室
 (15~16日) クラーク会館 講堂
 ポスター会場 : 学術交流会館 1階ホール, 2階ホワイエ

シンポジウム・各賞授与式会場 : 学術交流会館 講堂
 受付 : 学術交流会館 1階ホール
 大会事務局 : 学術交流会館 第2会議室
 懇親会 : サッポロビール園 (札幌市東区北7条東9丁目)

() は講演数, - は座長

		A会場	B会場	C会場	D会場
10月 14日 (日)	09:30~ 12:30	気候システム I (19, A101~A119) -尾瀬智昭-	熱帯大気 (19, B101~B119) -山田広幸- -寺尾 徹-	降水システム I (16, C101~C116) -折笠成宏-	大気境界層 (19, D101~D119) -大橋唯太- -清野直子-
	13:30~ 14:00	第34期理事長学術講演			
	14:00~ 16:30	シンポジウム「雪氷圏から語る気象と気候」 司会: 藤吉康志 基調講演: 青木輝夫, 廣田知良, 大畑哲夫, 三寺史夫, 保坂征宏			
	17:00~ 18:00	ポスター・セッション (93, P101~P193)			
10月 15日 (月)	09:15~ 12:00	気候システム II (17, A201~A217) -鬼頭昭雄-	気象予報 (16, B201~B216) -宮本健吾-	降水システム II (16, C201~C216) -安永数明-	エアロゾル (17, D201~D217) -渡辺幸一-
	13:00~ 15:30	スペシャルセッション 「産業と気象」 (11, A251~A261) -酒井重典-	大気力学 (13, B251~B263) -杉本憲彦-	降水システム III (14, C251~C264) -坪木和久-	微量気体 (15, D251~D265) -北 和之-
	15:45~ 17:30	山本正野論文賞・堀内賞授与式 山本正野論文賞・堀内賞記念講演			
	18:30~ 20:30	懇親会			
10月 16日 (火)	09:15~ 11:30	スペシャルセッション 「静止衛星観測 I」 (11, A301~A311) -中澤哲夫-	スペシャルセッション 「さまざまな対流」 (10, B301~B310) -杉山耕一朗-	相互作用 (13, C301~C313) -見延庄士郎-	中層大気 (12, D301~D312) -西井和晃-
	11:30~ 12:30	ポスター・セッション (93, P301~P393)			
	13:30~ 17:00	スペシャルセッション 「静止衛星観測 II」 (17, A351~A367) -早坂忠裕- -高橋暢宏- -秋元 肇- -中澤哲夫- -笠井康子-	スペシャルセッション 「熱帯低気圧の力学研 究・モデリング・予報の 未来」 (18, B351~B368) -上野 充- -坪木和久- -別所康太郎- -筒井純一-	放射 (8, C351~C358) -小林隆久- 観測手法 (11, C361~C371) -永井智広-	気候システム III (22, D351~D372) -水野 量- -田 少奮-

発表件数 : 500件 (口頭発表314, ポスター186)

口頭発表の講演・質疑時間 : 7分と2分

当大会予稿集に掲載された研究発表の文章・図表を複製あるいは翻訳して利用する場合には, 日本気象学会の文書による利用許諾を得た上で出所明示して利用しなければなりません。ただし著作者自身による利用の場合は, 利用許諾の申請は不要です。

本プログラムの記載内容に関する問い合わせは, 〒305-0052茨城県つくば市長峰1-1気象研究所予報研究部内 講演企画委員会 (e-mail:kouenkikaku2007a@mri-jma.go.jp) まで

大会参加費・懇親会費

大会参加費

- 大会参加費は以下の表の通りです。

大会参加費		
種別	前納	当日
講演者A	8,000円	—
講演者B	5,000円	—
聴講者	3,000円	4,000円

- 講演者の種別：
講演者A：研究機関・大学に所属する講演者（ただし、学部生・院生は除く）
講演者B：講演者Aに該当しない講演者
- 講演件数が2件の場合も大会参加費は変わりません（講演件数による加算はありません）。
- シンポジウムのみに参加する場合は、参加費は無料です。

懇親会費

- 懇親会費は以下の表の通りです。

懇親会費		
種別	前納	当日
一般	5,000円	5,500円
学生	4,500円	5,000円

支払方法

- 講演者の参加費の支払い方法は前納のみとなっており、既に受付は締め切られています。
- 懇親会費及び聴講者の参加費を前納する場合は、大会ホームページにて2007年9月11日（火）までにお支払下さい（郵便振替の場合は2007年9月4日（火）まで）。それを過ぎた場合は当日払いとなります。

領収書

- 領収書は参加者本人の名義で、大会当日受付にて名札と一緒に手渡される予定です。
- 名義の変更が必要な場合には再発行が可能ですので、大会当日受付にてお申し出下さい。

その他

- 一旦支払われた参加費・懇親会費は返却いたしません。
- 参加費・懇親会費には会員・非会員の区別はありません。
- 非会員の方も規定の参加費・懇親会費をお支払い頂ければ大会・懇親会に会員と同様に参加することができます。

講演の方法

一般口頭発表・スペシャルセッション

- 一般口頭発表の講演1件あたりの持ち時間は9分（講演7分・質疑2分）です。
- スペシャルセッションの発表時間については世話人からの指示に従ってください。
- 講演にはPCプロジェクターとOHPが使用できます。
- 止むを得ない事情で使用機器が講演申込時に予め届け出ていた機器と異なる場合は、セッション開始前までに座長と会場係にその旨を申し出て下さい。
- PCプロジェクターを使用する際は予め以下の点をご了承ください。
 - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備します。
 - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
 - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応することが

あります。また、場合によってはOHPによる発表に切り替えさせて頂くこともあります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備やOHPシートの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

ポスター発表

- 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦180 cm × 横90 cm程度となっています。
- ポスターの掲示にあたって画鋏・ピン・セロテープが使用できません。これらは発表者自身で準備してください。
- ポスターの掲示可能時間は以下の通りです。会場の都合上時間厳守をお願いします。
 - ✓ 第1日の発表者は10月14日12:00～10月15日12:00
 - ✓ 第3日の発表者は10月15日15:00～10月16日16:00
- ポスター会場での機器の使用は、講演申し込み時に申し出ていたもの以外は原則として認められません。

保育施設の紹介について

今大会では、都合により大会実行委員会による保育施設の斡旋や利用料金の補助は行いませんが、利用者が直接施設に連絡を取って頂くことを前提に保育施設の紹介を行います。ご希望の方は、下記の担当者までご連絡下さい。

連絡先：石渡正樹（北海道大学大学院地球環境科学研究科）

TEL：011-706-235, FAX：011-706-486, E-mail：momoko@ees.hokudai.ac.jp

シンポジウム「雪氷圏から語る気象と気候」

日時：大会第1日（10月14日） 14:00～16:30

会場：北海道大学 学術交流会館 講堂（大会A会場）

司会：藤吉康志（北海道大学低温科学研究所）

※シンポジウムの聴講は無料です

趣旨：

氷河の縮退や海氷面積の減少など、地球温暖化によって雪氷圏は大きく変動しつつある。雪氷圏の変動はアイス・アルベードフィードバックを通じて、温暖化を加速する可能性が指摘されている。アルベード変化には、雪氷面積の減少以外にも、雪氷表面の汚れや雪粒の大きさの変化も関与している。雪氷圏の変動は、気候への影響以外にも、水資源、凍土の融解にもなうメタンの放出など、その変動に付随する様々な影響を地球環境に及ぼす可能性がある。このような背景から、2000年からWCRPのコアプロジェクトの一つとして雪氷圏と気候に関する研究計画(CliC: The Climate and Cryosphere)が始まっている。そこで、本シンポジウムでは「雪氷圏から語る気象と気候」をテーマとして、ミクロな放射過程・北海道の農業・環オホーツク・ユーラシア・地球温暖化と様々な切り口で雪氷圏と気候の問題を語りたい。

基調講演

- | | |
|-----------------------------------|--------------------|
| 1) 「大気エアロゾルの沈着が積雪アルベドに与える影響」 | 青木輝夫（気象研究所） |
| 2) 「北海道・道東地方の土壌凍結深の減少傾向および農業への影響」 | 廣田知良（北海道農業研究センター） |
| 3) 「北ユーラシアにおける雪氷圏変動と気候」 | 大畑哲夫（地球環境観測研究センター） |
| 4) 「環オホーツク圏領域気候モデル」 | 三寺史夫（北海道大学低温科学研究所） |
| 5) 「温暖化シミュレーションに見る雪氷と気候」 | 保坂征宏（気象研究所） |

総合討論

スペシャルセッションの概要紹介

産業と気象 ～気象情報・技術の産業への寄与を考える～

日時：大会第2日（10月15日） 13:00～15:30

場所：A会場

趣旨：気象（気候）が産業に及ぼす影響は大きく、気象（気候）の調査・研究成果は、従来から、多くの産業に活用されてきた。しかし、近年、異常な気象（気候）状態が頻発するようになり、地球温暖化問題、環境問題などとも相俟って、社会の対応は複雑化してきている。その一方で、気象（気候）の観測・予測・情報通信技術が大きく進展するとともに新たな知見も得られ、そうした事態への対応策を幅広く提案できる技術基盤も整ってきている。こうした背景の下、このセッションでは、次のような観点での発表を募り、産業振興の資を得るとともに実学としての気象研究の課題を渉猟する場としたい。

- ① 気象（気候）が産業に深刻な影響を与えた事例の気象学的分析など
- ② 産業現場の気象（気候）ニーズ（気象（気候）の影響と深刻度、気象情報・技術の利用目的など）
- ③ 気象（気候）の情報・技術等の、利用成功・失敗事例など
- ④ 提供可能な気象（気候）情報・技術（有効な従来情報・技術、最近提供可能となった情報・技術、近い将来提供可能となる情報・技術）

講演内容は、上記①～④のほか、他の複合した内容や研究の中間報告でもよいので、多数の発表をお願いしたい。

世話人：若原勝二（札幌総合情報センター）、竹田康生（札幌管区气象台）、波松章勝（日本気象予報士会（北海道））、岩田 修、白石晶二（日本気象予報士会）

静止衛星観測Ⅰ：気象衛星ひまわりの30年

日時：大会第3日（10月16日） 9:15～11:30

場所：A会場

趣旨：静止気象衛星「ひまわり」が打ち上げられたのが1977年7月。それから今年で30年になる。そこで、静止気象衛星が気象学に果たしてきた貢献を振り返り、静止気象衛星がどのようなインパクトをわたしたちの学界や社会に与えてきたのか等、衛星気象学について考えるセッションとしたい。

- ・ 静止気象衛星の現状と課題
- ・ 静止気象衛星のサイエンスへの貢献
- ・ 静止気象衛星の社会への貢献

世話人：井上豊志郎（東京大学気候システム研究センター），川村 宏（東北大学大気海洋変動観測研究センター），隈部良司（気象庁気候情報課），中澤哲夫，別所康太郎（気象研究所）

静止衛星観測Ⅱ：静止衛星リモートセンシング観測の新展開

日時：大会第3日（10月16日）13:30～17:00

場所：A会場

趣旨：近年の世界的な流れとして，大気科学や気候変動研究において，高時間分解能で1日24時間の連続測定が可能な静止衛星観測の重要性が改めて注目されている．現在は「気象衛星ひまわり」のように，主として可視・赤外の限られた波長域を用いた観測が行われているが，近年の急速な技術の進歩により，マイクロ波から赤外域まで連続した熱放射分光スペクトル静止衛星観測が可能となり，欧米では実用に向けた検討を開始している．これら新しい技術により，どのような新しい現象が解明されるのであろうか．それを明らかにするためには観測データを研究に活用する立場の人たちと，衛星開発を行う人たちが十分に議論を行う事が必要である．本セッションでは，熱放射静止衛星リモセン観測フィージビリティ研究によるターゲット物理量（雨/雲/水蒸気，温度，風速，エアロゾル，大気汚染物質，温暖化物質）の観測推定精度に関する議論を基に，地球大気科学，気候変動，環境監視などの衛星観測データを研究に活用する立場の研究者から静止衛星観測への期待・科学的要求を議論する事を目的とする．また，現在運用中の静止衛星・周回衛星と組み合わせた観測や解析の議論も歓迎する．

世話人：笠井康子（情報通信研究機構），早坂忠裕（総合地球環境学研究所），秋元肇（地球環境フロンティア研究センター），高橋暢宏（情報通信研究機構）

さまざまな対流

日時：大会第3日（10月16日）9:15～11:30

場所：B会場

趣旨：地球を含む諸惑星の大気において，対流はそれ自体として興味ある現象であるとともに，エネルギーや物質などの鉛直輸送を介して大循環や気候に至る大規模な大気構造を拘束する重要な運動構造の一つである．しかし地球以外の惑星大気における対流に関しては観測的情報が不足しており，しかも凝結成分の数や絶対量，放射や地表面過程との相互作用などにおいて，地球大気における熱対流や雲対流と大きく異なると思われる側面も多々あり，十分には理解されていないのが現状である．そこで本セッションでは，地球を含めた惑星大気の“さまざまな対流”に関連した幅広いテーマについて，研究の現状を議論し今後の方向を展望したい．

世話人：小高正嗣（北海道大学大学院理学学院），中島健介（九州大学大学院理学研究院），高木征弘（東京大学大学院理学系研究科）

熱帯低気圧の力学研究・モデリング・予報の未来：大山先生・栗原先生の業績を記念して

日時：大会第3日（10月16日）13:30～17:00

場所：B会場

趣旨：2006年12月に大山勝通先生が逝去され，また，2007年3月には栗原宜夫先生が逝去された．お二人とも気象庁に在職後は，米国の大学や研究機関で熱帯低気圧の理論的・数値的研究に携われ，それぞれ不朽の業績を確立された熱帯低気圧研究の先達である．日本および世界の熱帯低気圧に関する研究にとって，お二人を失った痛手はあまりに大きい．本大会では，熱帯低気圧研究にそれぞれ一里塚を築かれた両先生を記念するセッションを開催する．このセッションでは，お二人の業績を振り返り，それを踏まえて，熱帯低気圧および台風研究の未来を展望することとする．発表のテーマとしては，お二人が取り組まれた熱帯低気圧の発生・発達に関わる諸概念の研究，積雲パラメタリゼーションをはじめとするモデリング，先進的かつ実用的な予報手法の開発など，熱帯低気圧の力学・モデル・予報に関する研究を中心とする．一方，それらと不可分の関係にある熱帯低気圧の観測的・解析的研究からの知見も期待する．また，雲解像モデルや全球モデルによる熱帯低気圧研究なども取り上げる．お二人が残された研究成果に鑑み，特に将来の台風予報・台風観測に資するようなものを期待する．多数の方の発表と聴講をお願いしたい．

世話人：山岬正紀（地球環境フロンティア研究センター），吉岡真由美（東京大学海洋研究所），上野 充（気象研究所），筒井純一（電力中央研究所），坪木和久（名古屋大学地球水循環研究センター），別所康太郎（気象研究所）

研究会のお知らせ

大会期間中とその前後に以下の研究会が予定されています。興味のある方はご自由にご参加下さい。

第29回メソ気象研究会

日時：2007年10月13日（土）（大会前日）13:30～18:00

場所：北海道大学 学術交流会館 講堂（大会A会場）

テーマ：「竜巻—その実態の理解はどこまで進んだのか」

コンビーナー：坪木和久（名大地球水循環）

内容：昨年，延岡，佐呂間とたてつづけて起こった竜巻で，竜巻に対する関心が高まり，その予測への社会の要請は非常に強いものとなった．それに対応して気象庁ではまえだおしでドップラーレーダーが多数導入されることになり，また科学振興調整費「竜巻等の実態および発生予測と対策」

(研究代表者: 田村幸雄東京工芸大学教授) が開始された。しかしながら、予測実現への期待があまりに性急であり、わが国における竜巻の実態についてどの程度理解が進んだのかが十分議論されないまま、予測へ向けた動きが始まりつつある。そこで今回、札幌で行われるメソ気象研究会では、昨年、甚大な被害をもたらした佐呂間と延岡で発生した竜巻に重点を置き、わが国の竜巻についてこれまで得られた知見をまとめたい。さらに、竜巻の予測と防災のための短期的及び長期的方策はどうあるべきか、それにより予測と減災はどこまで可能であるのかなどについて議論をしたい。

プログラム:

新野宏(東大海洋研): 「竜巻の理解の現状について」
小林文明(防衛大): 「「延岡竜巻」と「佐呂間竜巻」
ー竜巻の多発と多様性ー」
坪木和久(名大地球水循環): 「竜巻とその親雲の理解のための雲解像モデルの利用」
加藤輝之(気象研): 「竜巻をもたらす環境場と佐呂間町の竜巻をもたらした積乱雲のシミュレーション」
益子 涉(気象研): 「2006年台風第13号に伴う竜巻のシミュレーション ー環境場・竜巻をもたらしたスーパーセル・竜巻の数値解析ー」
河井宏允(京大防災研): 「風工学から見た竜巻等への防災対策の課題」
鈴木 修(気象研): 「竜巻の予測にむけた取り組みについて」
総合討論

世話人: 坪木和久(名大地球水循環), 加藤輝之(気象研), 小倉義光(東大海洋研)

連絡先: 坪木和久(名大地球水循環)

E-mail: tsuboki@rain.hyarc.nagoya-u.ac.jp

極域・寒冷域研究連絡会

日時: 2007年10月14日(日)(大会第一日) 18:00~2時間程度

場所: 北海道大学 学術交流会館 講堂(大会A会場)

話題: 特別講演「極域海洋学研究で学んだこと」

講演者: 若土正暁(北大低温研)

今回は、日本における極域海洋学研究を常にリードしてきた北大低温研教授若土正暁氏による特別講演を行います。若土氏は、海水生成時の高塩分水(ブライン)排出機構を調べる実験的研究を皮切りに、南極周辺やオホーツク海での海水域変動や海洋構造の解明に、直接観測・データ解析・数値研究・室内実験などあらゆる手法で取り組み、先駆的な成果を挙げてきました。また最近では、オホーツク海研究のプロジェクトを成功させ、データ空白域であったオホーツク海の気候ー海氷ー海洋システムの実態を明らかにし、この功績によって2005年度堀内賞を受賞しています。当日は、参加者の方々の質疑応答を交えつつ、お話し頂く予定です。

代表: 山崎孝治(北大院地球環境)

世話人: 平沢尚彦(極地研), 中村 尚(東大院理), 浮田甚郎(千葉大CEReS), 高田久美子(FRCGC), 阿部彩子(東大気候システム), 佐藤 薫(東大院理), 本田明治(FRCGC), 齋藤冬樹(FRCGC), 猪上 淳(IORGC), 高谷康太郎(FRCGC)

URL: http://polaris.nipr.ac.jp/~pras/coolnet/cl_index

連絡先: 高谷康太郎(FRCGC)

TEL: 045-778-5526, FAX: 045-778-5707,

E-mail: takaya@jamstec.go.jp

第3回統合的陸域圏研究連絡会

日時: 2007年10月14日(日)(大会第一日) 18:00~20:00

場所: 北海道大学 学術交流会館 小講堂(大会B会場)

内容: 「統合的陸域圏研究連絡会」においては、陸面を中心とする大気境界層から土壌内に渡る陸域圏を研究の主な対象とし、そこにおける物理的、生物的諸過程の理解に向けた、広い視野に立った研究のための情報交換、陸域圏を対象とした基礎的なメカニズムの理解と、他の圏との広域的・長期的相互作用システムの解明、直接観測、間接観測、およびモデリングの融合、空間的・時間的スケール間ギャップの問題の解決への方向性の探求、正確な現状の認識と、実質的に意味のある手法の開発に向けた努力、およびそれらのための研究協力関係の構築を目的としています。今回は、陸域圏研究におけるリモートセンシングデータの利用をテーマとした研究会の初回として、世話人2名による講演を行います。

講演者および講演題目:

西田顕郎(筑波大) 「陸域生態系研究におけるリモートセンシング」

青木輝夫(気象研) 「GLI及びMODISデータによる積雪粒径と不純物濃度抽出」

世話人: 馬淵和雄(気象研), 大谷義一(森林総研), 青木輝夫(気象研), 西田顕郎(筑波大), 伊藤昭彦(環境研)

代表連絡先: 馬淵和雄(気象研)

TEL: 029-853-8609, FAX: 029-855-2552,

E-mail: kmabuchi@mri-jma.go.jp

北海道気象予報士会創立10周年記念フォーラム ー蜃気楼から気象を学ぶー

日時: 2007年10月14日(日)(大会第一日) 18:00~20:00

場所: 北海道大学 学術交流会館 第1会議室(大会C会場)

プレゼンター: 木下正博(富山県総合教育センター), 金子 和真(北海道気象予報士会), 大鐘卓哉(小樽市総合博物館)

アドバイザー: 藤吉康志(北大低温研)

内容: 北海道気象予報士会では創立10周年を記念して「蜃気楼から気象を学ぶ」というテーマでフォーラムを企画しました。日本蜃気楼協議会に所属する木下正博さん、金子和真さん、大鐘卓哉さんにプレゼンターとして北海道や日本各地での蜃気楼の観測事例の紹介を行っていただきます。併せて、蜃気楼発生のライブ実験を通じて博物館や科学館での気象に関する展示についても紹介いただきます。このとき、一般の講演会と違い、藤吉康志さんにアドバイザーとして、気象学会で議論されている最新の気象学の話題なども随時補足いただくというかたちで進め、蜃気楼という地域の気象現象や環境について共に考え、楽しく対話しあえるフォーラムにしたいと思っています。このフォーラムを気象学会秋季大会にあわせて企画したのは、日本全国から気象の研究者が北海道に集まる機会に、研究者だけでなく、気象予報士や気象庁職員、気象友の会の会員など、普段なかなか直接交流することができなかった気象に興味のある人たちが一堂に会し、それぞれの立場で「気象」を学んでいただく場を作りたいと考えたからです。仕事で気象の研究をしている方には、アマチュアのフィールド観測や解析・研究を知ること、自らの研究に何らかの刺激を受けていただき、普段の研究が社会にどのように関わっているか知るきっかけになると思います。気象学は天気予報な

どを通して非常に身近に感じやすい学術分野ですが、一般の市民はもちろん気象予報士から見ても気象学は難しいというイメージがあります。層気候というどのレベルの人もイメージしやすい話題を通して参加者全員が対話し、そのギャップを埋めるとともに、最近の研究に不可欠となりつつあるアウトリーチ活動の参考にもなるようなフォーラムにしたいと考えております。興味をお持ちの幅広い分野の方々の、多数の参加をお待ちしております。

主催: 北海道気象予報士会

共催: 気象学会北海道支部、札幌管区気象台(予定)、小樽市総合博物館

問合せ先: 北海道気象予報士会創立10周年記念フォーラム実行委員会 竹田康生(札幌管区気象台)

E-mail: y_takeda@met.kishou.go.jp

第4回地球観測衛星研究連絡会

日時: 2007年10月14日(日)(大会第一日) 18:15~20:15

場所: 北海道大学 環境科学院 C104講義室(大会D会場)

テーマ: 気象研究のための新しい観測の可能性 -新規周波数開拓-

内容: 今回は、衛星観測の新たな可能性を探ることを目的として、観測周波数(波長)の新たな開拓やこれまで用いられてきた周波数帯での高度な利用の方向性についての話題を提供していただきます。関心をお持ちの方は是非ご参加ください。

話題提供者:

- 1: 赤外観測から(仮題) 今須良一(東大気候システム)
- 2: テラヘルツリモートセンシング観測 笠井康子(NICT)
- 3: 可視紫外の方、もしくは他の手法の方
総合討論

世話人: 中島孝(東海大)、日暮明子(環境研)、塩谷雅人(京大学生存研)、早坂忠裕(地球研)、高橋暢宏(NICT)

連絡先: 高橋暢宏(NICT)

TEL: 042-327-6179, FAX: 042-327-6666,

E-mail: ntaka@nict.go.jp

オゾン研究連絡会

日時: 2007年10月14日(日)(大会第一日) 18:00~20:00

場所: 北海道大学 環境科学院 講堂

内容: 今回は「2007年春の光化学スモッグ」というテーマで、以下の講演をお願いしております。今年春に九州をはじめ日本各地で例年より早く光化学オキシダント注意報が発令され、社会的な関心を呼びました。この件に限らず、近年日本における光化学オキシダント濃度には増加傾向が見られており、その原因や今後の推移に関して関心もたれています。今回の連絡会では、日本や東アジアにおける光化学オキシダントの現状、最近の傾向、今春のエピソードに関してお話をさせて頂く予定です。関心をお持ちの方は是非お集まり下さい。

講演者および講演題目:

- 1) 秋元 肇 (FRCGC) 「対流圏オゾンの半球汚染とアジア汚染」
- 2) 大原 利真 (環境研) 「光化学オゾンの最近の特徴 - 今春の高濃度エピソードを中心として -」

世話人: 笠井康子(NICT)、川上修司、河本 望(JAXA)、永島達也(環境研)、庭野将徳(FRCGC)、村田 功(東北大院環境科学)

連絡先: 村田 功(東北大院環境科学)

TEL: 022-795-5776, FAX: 022-795-5775,

E-mail: murata@pat.geophys.tohoku.ac.jp

講演企画委員会からのお知らせ

非会員による大会での講演について

最近、非会員のままで継続して大会での講演を行うケースが少なからず見受けられます。特に教官との共著で講演を行う学生や院生の方が多いようですが、一般の方もおられるようです。大会での講演は気象学会会員としての貴重な権利であり、「共著者に会員がいる場合は非会員の大会での講演を認める」という規定は、あくまでも短期滞在の外国人や他分野の研究者が気象学会において一時的に講演を行う場合の特例です。これまでお願いしてきましたが、気象学会において継続的に講演を行いたい場合には会員になって頂くように強く望みます。

予稿の再掲について

2007年度春季大会講演予稿集において印刷に不具合のあった以下の2件の予稿を、本大会講演予稿集の本文冒頭に再掲させて頂きました。

P404 岩崎一晴(都立大理)・泉岳樹(首都大都市環境) 他1名 メソスケール気象モデルを用いた羅臼だしの再現実験

P405 稲村友彦(都立大理)・松山洋(首都大都市環境) 他6名 まつぼり風の数値シミュレーション~現実の地形と仮想的な地形を用いて~

2008年度春季大会の予告

2008年度春季大会は、2008年5月18日(日)~21日(水)に横浜市開港記念会館・横浜情報文化センター(横浜市中区)で開催される予定です。大会告示は「天気」12月号に掲載予定です。なお、春季大会の講演申し込み締め切りは2008年2月頃となる予定です。